首都大学東京一時保育施設「首都大 KIDS」

首都大学東京一時保育施設「首都大KIDS」では、室内での保育や季節の制作だけでなく、天気の良い日には近隣へのお出掛けを楽しむこともあります。秋の行楽日和の中、子どもたちと保育士の先生方が南大沢キャンパスへ遊びに来てくれました。

10月はハロウィンにちなんで、子どもたちが仮装をしてやってきました。先生手作りの衣装を身にまとい、ハロウィンにちなんで「トリック・オア・トリート」と呼びかけながら歩く姿に、通りかかった職員も思わず笑みを漏らすような光景が繰り広げられました。当日は参加できなかった子どもたちも、登園日に一時保育施設内で仮装をして、記念撮影を楽しんだそうです。

11月は勤労感謝の日にちなんで、学長室とダイバーシティ推進室の職員にプレゼントを渡しにやってきてくれました。子どもたちから手作りのプレゼントを渡された職員は大喜び。満面の笑顔で一緒に写真に納まりました。

首都大KIDSでは、この他にも外国人講師による英語レッスン「coco塾」や季節の行事など、多様なプログラムで楽しく毎日が過ごせるよう、先生方が工夫をこらしています。

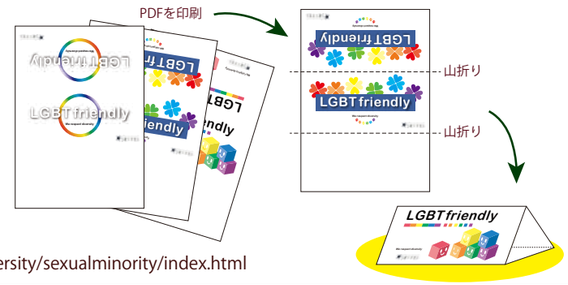
利用を検討されている方は、WEBサイトをご覧いただくかダイバーシティ推進室までお問い合わせください。 **随時見学を受け付けます。**

＊首都大KIDS▶http://www.comp.tmu.ac.jp/diversity/child/index.html

「レインボーマーク」を作りました

赤、橙、黄、緑、青、紫の６色からなるレインボーフラッグは、セクシュアル・マイノリティの尊厳や、当事者への支援を象徴するサインとして広く用いられています。ダイバーシティ推進室では、セクシュアル・マイノリティ当事者への支援を目に見える形にすることを目指して、レインボーをモチーフにしたシンボルマークを作成しました。ダイバーシティ推進室のWEBサイトからデータをダウンロードすることができます。デザインは３タイプありますので、お好みのデザインをご利用ください。

＊セクシュアル・マイノリティ支援 ▶ http://www.comp.tmu.ac.jp/diversity/sexualminority/index.html



ダイバーシティ推進室 各種相談のご案内

ダイバーシティ推進室では、誰もが安心して学び、働くことができる環境を保つため、ダイバーシティ推進室のスタッフ、および専門相談員による各種相談を実施しています。相談に際しては、相談される方のニーズを尊重し、それに応えるため、学内他組織と柔軟に連携して相談を進めます。また、相談内容については、相談者の了解なく他に提供されることはありません。

●ダイバーシティ推進室相談

男女共同参画、障がいのある構成員支援、セクシュアル・マイノリティなど多様性を踏まえた構成員支援に関して、ダイバーシティ推進室の特任研究員が相談を承ります。必要に応じて、ワーク・ライフ・バランス相談や女性の健康相談など、専門相談員による相談に変更することも可能です。

●ワーク・ライフ・バランス相談

仕事や研究・教育活動と家庭生活の両立や、ライフプランなどについて、キャリアコンサルタント技能士が相談を承ります。

●女性の健康相談

妊娠、出産をはじめ、女性特有の健康について、助産師の先生が相談を承ります。内容によっては、子育てに関する相談にも対応可能です。

●障がいのある学生相談

さまざまな障がいによって支援が必要な場合や、どういった支援が可能かといったことについて、ダイバーシティ推進室の障がいのある構成員支援を担当する特任研究員が相談を承ります。必要に応じて、学内の関係部署との調整なども行います。

＊ダイバーシティ推進室相談 ▶ http://www.comp.tmu.ac.jp/diversity/counseling/index.html

編集後記

みみカレッジで、盲ろう者のかたとお話しする機会がありました。私の拙い手話を触って読み取ってくれてとても感動しました。また、聴導犬のデモンストレーションでは聴覚障がい者に音を知らせ、必要ない時は寄り添って座っている聴導犬を思わずなでたくなりましたが、それはいけないことでした。 かわいいですよね→

首都大学東京　ダイバーシティ推進室
〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1　図書館本館 1 階
電話：042-677-1337（直通）／内線 2571　FAX：042-677-1355
E-Mail：diverwww@tmu.ac.jp
URL：http://www.comp.tmu.ac.jp/diversity/
発行日：2018 年 12 月 28 日
編集・発行

No.22 December 2018

Newsletter
ダイバーシティ通信

首都大学東京

2018 年度 第 2 回バリアフリー講習会

色のバリアフリーについて考える～色弱の基礎知識と配慮～

1　はじめに

2018年12月7日（金）図書館プレゼンテーションルームにて、2018年度第２回バリアフリー講習会「色のバリアフリーについて考える～色弱の基礎知識と配慮～」を開催しました。講師にお招きした岡部正隆氏は東京慈恵会医科大学で教鞭をとる一方で、色弱の当事者として、色弱に関する理解啓発活動に取り組んでおられます。講習会では「色に配慮されていない社会における情報弱者」を色弱者、その視覚特性を色弱と定義して、色覚について正常色覚を含め４つのタイプに分類し、その特徴や配慮について紹介して頂きました。

2　色の見える仕組み

色は網膜上の３種類の錐体（青、緑、赤）が様々に反応することで認識されるため、その人の錐体の特性が異なれば、他の人と色の見え方が違うそうです。また、色弱の方は日本人男性の20名に１名、日本人女性500名に１名の割合で存在しますが、遺伝的な特性によるもので、視力など他の眼の機能には問題がないそうです。その上で、岡部氏は「色弱は何がメジャーな見え方かの問題である」と指摘し、かつては就職等における制限があったが、現在は色弱の方も過ごしやすい環境を整えていくことが求められると話されました。

3　具体的な配慮

岡部氏が副理事長を務めるカラーユニバーサルデザイン機構（CUDO）の取り組みを踏まえて、配色や情報を伝える工夫等、具体的な配慮についてもお話がありました。

配色については、色弱の方の見え方をシミュレーションできるアプリ「色のシミュレータ」やCUD推奨の配色セットの活用、色の判別のしやすいチョークの使用など様々なツールを活用することで、色自体の配慮がしやすくなるといいます。伝え方の工夫については、例えばグラフや図表は「色+形の違い」を併用する、色を使った用紙を使う際は用紙の一部に色の名前を表記する等、ちょっとした工夫が有効であることが紹介されました。

4　まとめ

色弱の方は外見で分からないため、困りごとがあったとしても我慢してやり過ごす経験が多く、配慮を申し出ることや社会的なアクションを行うことが容易ではないといいます。そのため、色の配慮については本人の申し出を待つのではなく、情報を発信する側が色弱の方がいることを前提に積極的な対応をすることが求められる、と締めくくりました。

5　感想など

「気づきと具体的な改善策がたくさん見つけられるご講演で本当に来てよかったです。もっと多くの人がこうした内容について学ぶ機会があるといいなと思います」（教員）、「イベントのポスターや委員会のカラー資料を作ることが多いのですが、自分の好みの色で作っていました。今後は教えていただいたアプリや配色セットを使っていきたいと思います」（職員）、「デザインの仕事に携わろうと思っているので、とてもためになりました。どんな組み合わせが分かりにくいか等がとてもよく分かりました」（学生）

当事者であり専門家の方のお話は非常に説得力がありました。情報を発信する側の取り組みが重要である、とのご指摘に基礎的な環境整備の重要性を再認識するものでした。ご講演いただきありがとうございました。

Contents

1
第２回バリアフリー講習会「色のバリアフリーについて考える～色弱の基礎知識と配慮～」

2
手話講習会（中級）
手話講習会（日野キャンパス）
日本聴覚障がい学生高等教育支援ネットワーク「第14回日本聴覚障がい学生高等教育支援シンポジウム」
TOKYOみみカレッジ
寄稿「四年間を振り返って」

3
ランチタイムレクチャー「ダイバーシティって、なんだろう？」
女性研究者ロールモデル集「未来を拓く－首都大学東京ゆかりの女性研究者たち」
ワーク・ライフ・バランスに関するニーズ調査を行いました
コラム「ダイバーシティとスポーツ」

4
首都大学東京一時保育施設「首都大KIDS」
「レインボーマーク」を作りました
ダイバーシティ推進室各種相談のご案内

手話講習会（中級）

昨年度に続き、今年度も中級の手話講習会（18名受講）を開催しました。中級クラスでは会話練習を積極的に行い、多くの受講生が日常的な経験について手話で受け答えができるようになりました。最終回では手話について意見発表をしました。言語としての手話の大切さを知った、手話の地域性に興味を持った、ろう文化をもっと知りたい、など様々な学びがあったようです。中にはより専門的に学ぶために単位化を望む声もありました。今後とも手話に親しみ、学べる環境を作っていきたいと考えております。ご協力いただきました八王子市聴覚障害者協会の皆さまに感謝申し上げます。以下、感想を紹介します。「手話の勉強をしたのは初めてでしたが、相手に伝えられたときは嬉しかったです。会話の練習は得るものが多かったです。講習会をきっかけにこれからも手話を続けていきたいです」「なぜそのような手話になったのかを知るのがとても楽しかったです。一年間ありがとうございました」

手話講習会（日野キャンパス）

次年度から聴覚障がい学生が日野キャンパスで学ぶため、11月1日（木）、日野キャンパスで手話講習会を初開催しました。講師は横山正見特任研究員と聴覚障がい学生の山口翔大さんが担当しました。

まず、前半に手話の知識・技術についての基本的なレクチャーを行い、後半は実習を行いました。実習では、聴覚障がい学生の窓口対応や、授業時の対応を想定した会話練習を中心に行いました。初めて手話を学ぶ方が多く、ぎこちない様子でしたが、「空間を利用する」といった表現のコツを次第に掴み、最後はグループで考えた手話会話を発表しました。ユーモアを交えた発表もあり、和やかな雰囲気の講習会となりました。以下、感想を紹介します。「手話は一つ一つ意味があり、芸術的であり綺麗だと思いました。家族にも教えたいと思います」「もっと手話を覚えたい気持ちになりました。こういう研修をまた実施して頂けると嬉しいです」

日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

10月28（日）早稲田大学で開催された第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウムにて、支援スタッフが本学の実践事例をポスター発表しました。聴覚障がい学生支援に取り組んで2年目になりますが、この間の課題を「教員との情報共有」、「一般学生の認知度」、「専門科目での支援」等にまとめ、課題に対する取り組みを紹介しました。

本学の発表には多くの方が来場しました。「エネルギッシュな支援活動が素晴らしい」、「アットホームな雰囲気が伝わる」、「各自の得意分野を活かした取り組みであることが分かった」等、様々なご意見・感想が寄せられました。

他大学の好事例では、学生が中心となり支援体制を構築している様子や手話をはじめとした専門的な支援に学生が積極的に関わっている様子が見受けられました。参加した学生も多くの示唆を得たようです。今回の経験を今後の支援活動に活かして参ります。

TOKYO みみカレッジ

11月18日（日）、聴覚障がいをテーマにした総合イベント「TOKYO みみカレッジ」（東京都主催、NEC、本学共催）が開催されました。今年度は基調講演にて横山正見特任研究員と聴覚障がい学生の山口翔大さん、支援スタッフの戸崎彩菜さんが本学の聴覚障がい学生支援について報告しました。

横山氏は現状と課題を概観し、大学と学生がともに取り組むことの重要性を指摘しました。山口さんは支援ニーズを伝えやすい信頼関係が大切であること、戸崎さんは、支援活動は支援スタッフにとってもかけがえのないものであることを話しました。来場者からは「大学の取り組みがよく分かった」、「聴こえない学生が支援を受けるだけでなく、積極的に支援体制構築に取り組んでいることに共感した」等の感想が聞かれました。

各所ではステージ発表、ワークショップ、関係団体の展示・紹介等、多様な企画が行われ、聴覚障がいや理想的な社会環境について考える機会となりました。

「四年間を振り返って」

首都大学東京に入学して、四回目の紅葉の季節になりました。

私は都市環境学部都市基盤環境コースに所属していますが、観光経営副専攻や学芸員課程、教職の単位も取っていました。支援スタッフになる前の大学一年前期、視覚障がい学生と同じ授業を一つ取っていました。障がい学生に配慮し先生が口頭で丁寧に説明をするので、私はなけなしの視力を振り絞る必要が無く授業を受けることができ、助かっていました。ダイバーシティ推進室のさまざまな活動を通して、その学生とも仲良くなりました。

手話講習会がきっかけで支援スタッフに登録しました。二年の夏、オープンキャンパスで初めてノートテイクで聴覚障がい学生を支援しました。習った手話を使える！とわくわくして臨みました。三、四年次は学生実験や専門科目がある中、週一回程度気軽にノートテイクの補欠として携わりました。ダイバーシティ推進室の皆さんや支援スタッフの仲間たちのおかげで、充実した大学生活を送ることができました。

これからもダイバーシティ推進室に入り浸り、充実した院生活を送りたいと思っています。

障がい者支援スタッフ
都市環境学部 都市環境学科
都市基盤環境コース 四年　横倉 恵美

ランチタイムレクチャー「ダイバーシティって、なんだろう？」

ダイバーシティ推進室の取組みや、障がい、文化的多様性、セクシュアル・マイノリティ、男女共同参画など、ダイバーシティにかかわる社会的な課題に対する理解を深めることを目的として開催されているランチタイムレクチャー。2018年度後期は全９回が開催されました。これまでのランチタイムレクチャーでは、基本的にダイバーシティ推進室の特任研究員が講師を務めてきましたが、今回は日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）参加学生による報告や、国際センター教員による報告、オリンピック・パラリンピック関連におけるボランティアセンターとの連携など、これまで以上に多様な主体が参画し、共に学び合う場となりました。

第１回の「首都大学東京の多文化共生への取組」においては、ダイバーシティ推進委員を務めている国際センターの黒田史彦准教授に講師をお願いし、外国籍の学生や教職員に配慮した情報提供のあり方や、日本語の読み書きにあまり慣れていない人に向けた「やさしい日本語」を使った情報の伝え方の基礎、大学における文化的多様性への配慮の必要性などについて、専門的な視点から実践事例を交えながらお話ししていただきました。

また、第６回から第９回にかけては「つなぐTOKYO2020」と題して、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会とダイバーシティやボランティアとの関係について、ボランティアセンターとの共催でレクチャーを行いました。この企画は、ダイバーシティ推進室の支援スタッフとボランティアセンターの学生コーディネーターを兼任している学生の発案によるもので、「自分たちのやりたいことをやってみる」というダイバーシティ推進室の支援スタッフの特徴が存分に発揮された企画となりました。

2017年度から始まったランチタイムレクチャーも回を重ね、多様な主体が参画することで内容的にも多様性を増し、まさに「ダイバーシティ」という言葉の持つ深みや広がりを実感できる場となってきていることを感じます。ダイバーシティ推進室では、今後もこうした取組みを継続していく予定です。

女性研究者ロールモデル集「未来を拓く－首都大学東京ゆかりの女性研究者たち」

日本の研究者における女性の割合は15.7%となっており、諸外国と比較して非常に少ない数字となっています（『男女共同参画白書平成30年版』より）。国際的な競争力の向上や学問研究の発展、企業活動のさらなる活発化、イノベーションの促進など多方面から、女性研究者が少ない現状を改善し、理系・文系等の学問分野にかかわらず、研究職を目指す女性を増やすことは急務といえるでしょう。しかしその一方で、現実として女性研究者が少ないことから、大学生や大学院生が将来、研究者として働くことを想像することが難しい状況にあることも伺えます。

そこで、ダイバーシティ推進室では、本学の大学院を修了し、研究者として活躍している女性のロールモデル集を作成しました。研究職として働くことの魅力や本学で学んだこと、実際のキャリアパスなどを紹介しています。研究者を志す女性の一助として、参考にしていただければ幸いです。

＊PDFファイルを閲覧・ダウンロードできます。
http://www.comp.tmu.ac.jp/diversity/promote/index.html

ワーク・ライフ・バランスに関するニーズ調査を行いました

首都大学東京ダイバーシティ推進室では、教職員のワーク・ライフ・バランス実現のための支援に取り組んでいます。このたび、今後の取組みの方向性を検討することを目的として、教職員を対象としたアンケートを実施しました。

子育てに関する支援については、保育施設に対するニーズが共通して高く見られ、日野・荒川キャンパスでも何らかの支援が必要という意見が寄せられました。また、男性の育児・介護休暇の取得を促進するべきとの意見が多く見られたことも特徴的と言えるでしょう。ワーク・ライフ・バランスに関する取組みとしては、在宅勤務やフレックスタイム制など柔軟な働き方を求める意見や、夕方以降の会議や事務手続きの簡略化など、業務そのものの見直しを求める意見が目立ちました。また、介護に関する支援やセミナー等の開催を望む声が複数見られるなど、新たなニーズの把握にもつながりました。

ご回答いただきました内容は、今後の取組みや支援制度などを検討するための資料として活用させていただきます。ご協力いただきましたみなさま、ありがとうございました。

＊調査結果の詳細は
http://www.comp.tmu.ac.jp/diversity/promote/index.html

ダイバーシティとスポーツ ～トランスジェンダー・アスリートの競技参加をめぐって

2018年12月に熊本県で開催された、ハンドボールのアジア選手権において、トランスジェンダーの選手がオーストラリア代表としてプレーしました。ハンナ・マウンシー選手は、かつて男性としてオーストラリア代表に選ばれたことがあります。2015年に性別適合手術を受け、現在では女性として生活し、プレーしています。

しかし、このマウンシー選手、2017年にはオーストラリアンフットボール女子リーグ（AFLW）への参加を拒否されたことがあります（*1）。また、今大会においても、対戦チームの一部の選手が宗教上の理由から「人前で男性と肌を合わせられない」と対戦を渋っていたという報道もあり、すべての人がマウンシー選手が女性としてプレーすることを歓迎しているわけではないことがうかがえます（*2）。

男性から女性へ性別を変更したアスリートに対しては、しばしば「男性の身体に生まれた者が女性として競技に参加するのは不公平だ」などと言われますが、トランスジェンダー・アスリートは、自分が優位な立場に立つために性別を変更したわけではありません。しかし、特に女性アスリートの立場からすれば、こういった感情が生じることも無理からぬ面があるとも言えるでしょう。トランスジェンダー・アスリート当事者の希望を尊重しながらも、女性アスリートの違和感や戸惑いを単なる誤解や偏見として切り捨てることなく、どのようにすれば、多くの人が納得する状態を作り出すことができるのか。トランスジェンダー・アスリートの競技参加をめぐっては、非常に困難な問いが投げかけられているのです。

＊1…2018年２月に州リーグでプレーすることが認められました。　＊2…2018年12月９日付日刊スポーツ紙より。